

論文の和文要旨

論文題目

ロシア語における名詞句の統語構造と意味解釈の研究：顕在的な冠詞がない言語における名詞句の統語構造の問題によせて

氏名

宮内 拓也

伝統的に、いわゆる名詞句は名詞 N を主要部とする N の投射、すなわち NP として分析されてきたが、Fukui (1986) や Abney (1987) により DP 仮説が提唱されて以来、名詞句は DP として再分析されるようになった。現在では DP 仮説に基づき、名詞句において主要部は限定詞 D であり、その補部に NP が生起するという構造が、少なくとも顕在的な冠詞を持つ言語における名詞句の構造として一般的に広く受け入れられている。

顕在的な冠詞のない言語の名詞句について考えると、従来の NP 分析では名詞のみで句が構成される一方で、DP 仮説を採用した分析では形態的、音声的に実現しない限定詞を D として想定する必要がある。ロシア語などの顕在的な冠詞を持たない言語の名詞句において DP 仮説を採用すべきなのかという点については、現在でも議論が分かれており、いかなる言語でも名詞句は DP であると考え「普遍的 DP 仮説」(Pereltsvaig 2007 など) と名詞句が DP か NP かは言語によると考える「パラメーター化 DP 仮説」(Fukui 1986, Bošković 2009 など) が併存している。DP が言語横断的に存在するか否かという問題は理論言語学のひとつの大きな問題

になっていると言えよう。

本論文では形式的な形態論、統語論、意味論の理論的枠組みを用いて、顕在的な冠詞を持たない言語としてロシア語を取り上げ、その名詞句の統語構造、および意味解釈を検討する。そして、ロシア語の名詞句は DP 投射を持たないこと、すなわち少なくともロシア語においては DP 仮説は妥当ではないことを示す。これは DP が必ずしも言語普遍的ではないことを意味する。より具体的には、以下に示す通りである。

まず、Kayne (1994) の理論に立脚し、Despić (2013) が用いた方法論で束縛の観点からロシア語における DP の在、不在を議論する。ロシア語において、所有者(所有形容詞)が前置された主語と所有者と同一指標の目的語を持つ文は非文法的となるが、英語における同種の構文は文法的となる。この文法性の違いは両言語における名詞句の構造に起因しており、英語では DP が投射される一方で、ロシア語では DP が投射されないことを示す。また、ロシア語においても所有者(生格名詞句)を後置した名詞句が主語の場合は文法的となる。生格名詞句の統語的位置を考慮すれば、このパターンの文法性も所有者が前置される場合と同様に正しく予測できる。つまり、ロシア語における所有者を前置した場合と後置した場合の束縛における文法性の差は、ロシア語において DP がないという主張を支持する。

さらに、出来事名詞の項構造、出来事名詞句の統語構造をもとにロシア語における DP の在、不在について議論する。まず、出来事名詞の項構造を記述し、後続する生格名詞句の θ 役割に応じて出来事名詞を分類した上で、出来事名詞句の統語構造を提案する。分散形態論の枠組み (Halle and Marantz 1993) とフェイズが拡大するという提案 (Phase-Sliding; Gallego 2010) を採用することで、フェイズ不可侵条件 (Chomsky 2000) から出来事名詞に後続する生格名詞句の θ 役割に関する制限を提案した統語構造のもとで導くことができることを示す。また、英語ではサクソン属格を出来事名詞に前置させることができる一方で、ロシア語では生格名詞句を前置させることができないという言語事実が、束縛の現象と同様に英語では DP が投射され、ロシア語では DP は投射されないという両言語の名詞句の構造に起因することを示す。

加えて、従来 DP 仮説によって首尾よく説明されてきた現象である、本論文で名詞句内の付加詞とする各要素の共起関係と語順および所有形容詞と数詞を含む句の最大解釈について検討する。DP 仮説に従う場合、本論文で付加詞とする指示代名詞、所有形容詞、所有代名詞、量化詞の共起関係と語順は、各要素に応じた機能範疇の統語的位置によって導出されている。しかし、上記各要素の共起関係と語順は各要素の意味的特性により決定されており、統語的に DP、および各機能範疇を想

定せずともタイプ理論を用いて導出できることを示す。

また、所有形容詞と数詞を含む句の最大解釈について、Kagan and Pereltsvaig (2012) は最大解釈を得られるのは所有者の統語的位置に起因するとし、この現象がロシア語における DP の存在の根拠として扱っている。しかし、所有者がより統語的に低い位置にある生格名詞句を用いた場合にも最大解釈を得られるという言語事実を指摘し、存在文における定性制約、目的語の否定属格という現象を通じて、句の最大解釈の可否はより単純に定性の問題に帰着させることができることを示す。その上で、名詞句内においてどこでも併合可能な定の意味的演算子を提案し、DP 仮説を想定せずとも句における最大解釈を構成的に計算可能であることを示す。これは、少なくとも名詞句への定性の具現化を理由に DP を想定する必要はないことを意味する。

以上の通り、本論文ではロシア語の名詞句は DP 投射を持たない言語であると結論付け、DP が必ずしも言語普遍的ではないことを示す。

引用文献一覽

- Abney, Steven P. 1987. The English noun phrase in its sentential aspect. Doctoral Dissertation, MIT.
- Bošković, Željko. 2009. More on the no-DP analysis of article-less languages. *Studia Linguistica* 63:187–203.
- Chomsky, Noam. 2000. Minimalist inquiries. In *Step by step: Essays on minimalist syntax in honor of Howard Lasnik*, ed. Roger Martin, David Michaels, and Juan Uriagereka, 89–155. Cambridge, MA: MIT Press.
- Despić, Miloje. 2013. Binding and the structure of NP in Serbo-Croatian. *Linguistic Inquiry* 44:239–270.
- Fukui, Naoki. 1986. A theory of category projection and its applications. Doctoral Dissertation, MIT.
- Gallego, Ángel J. 2010. *Phase theory*. Amsterdam: John Benjamins.
- Halle, Morris, and Alec Marantz. 1993. Distributed morphology and the pieces of inflection. In *The view from building 20: Essays in linguistics in honor of Sylvain Bromberger*, ed. Ken Hale and Samuel Jay Keyser, 111–176. Cambridge, MA: MIT Press.
- Kagan, Olga, and Asya Pereltsvaig. 2012. Motivating the DP projection in languages without articles. *MIT Working Papers in Linguistics* 68:167–178.
- Kayne, Richard S. 1994. *The antisymmetry of syntax*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Pereltsvaig, Asya. 2007. The universality of DP: A view from Russian. *Studia*

Linguistica 61:59-94.